



亙理 伊達家  
亙理笹

# 郷土のかぜ

仙台市民図書館 郷土資料コーナーから

## 『仙台の絵師東東洋 <sup>あずまとうよう</sup> ~ほのぼの絵画の世界~』

郷土資料担当 丑田 美佐子

昨年10月31日(土)、メディアテーク1Fオープンスクエアで仙台市博物館との連携講座を行いました。テーマは「お殿さまと絵かき」。城や寺社に関わる美術作品などを通して、大名と絵師が生み出す美の世界について、図書館と博物館の職員が紹介する、という企画です。博物館の講師は学芸普及室長の樋口智之さん。美術が専門ではない私は、片っ端から本を手に取り、眺め、どのように紹介すればみなさんが本に興味を持ってくださるか日々頭を悩ませていました。そんな時に出会った1冊が、仙台市博物館の『仙台の絵師東東洋 ~ほのぼの絵画の世界~』です。

東東洋が仙台四大画家の一人だという事は知っていたものの、それまで絵をじっくりと眺めたことはありませんでした。「ほのぼの絵画の世界」というタイトルに惹かれ本を開いてみると、やわらかく温かみのある絵の数々に夢中になってしまいました。つぶらな瞳が印象的なかわいらしい「鹿図」。(東洋は鹿が好きで“白鹿園”という号を持っていたのだそうです。)庶民的な顔立ちの「観音・竜虎図」。(樋口さん曰く、この観音様は渥美清に似ていると…そういわれると、もはや寅さんにしか見えません。)そして、私が最も好きな絵は、獅子に乗った鍾馗を描いた「鍾馗図」です。鍾馗とは、疫病神を除く魔よけの神。去年は疫病退散のご利益があるとわれ「アマビエ」が流行りましたが、今年は東洋の「鍾馗図」をお守りにしてはいかがでしょうか。(とは言え、鍾馗もそれを背負う獅子もやる気がなさそうな顔に見えて、思わず笑ってしまいます。)

ところで実はこの本、樋口さんが15年程前に企画した展覧会の図録だそうです。こんな楽しい展覧会があったことを私は知りませんでした。実際にそれを観に行きたかったです。

先日、市民図書館所蔵の本『荒町界限物語~あらうんど・あらまち』『若林の散歩手帖』『新・仙台の散策』を参考に、東洋のお墓がある昌伝庵へ行って来ました。思ったよりひっそりとしたお墓で、見つけるのに苦労しました。お墓の前で手を合わせていると、東洋は本当に生きて仙台にいたのだ、自分が今いる場所に過去の人々の暮らしが重なっているのだ…ということを実感しました。そして、今この世に存在しない人たちとも本を通じてつながることができ、自分の世界が広がっていくのを感じました。講座にいらした方からは、栗原市金成の日枝神社に東洋の絵があると教えていただいたので、こちらもいつか訪れてみたいと思います。

みなさんも図書館で本を手に取り、新たな世界をのぞいてみませんか？



### <参考図書>

- 『仙台の絵師東東洋 ~ほのぼの絵画の世界~』 樋口 智之/執筆 仙台市博物館 S72セ
- 『荒町界限物語~あらうんど・あらまち』『若林区ウオッチング』スタッフ/編 若林区役所 仙台市荒町市民センター S29.1ア
- 『若林の散歩手帖 ~新寺から藤塚までの史跡を訪ねて~』 木村 孝文/著 宝文堂 S29.1キ
- 『新・仙台の散策 ~歴史と風土をたずねて~』 吉岡 一男/監修 宝文堂 S29.1シ

## ■古書紹介

### さながら江戸のリバティ…

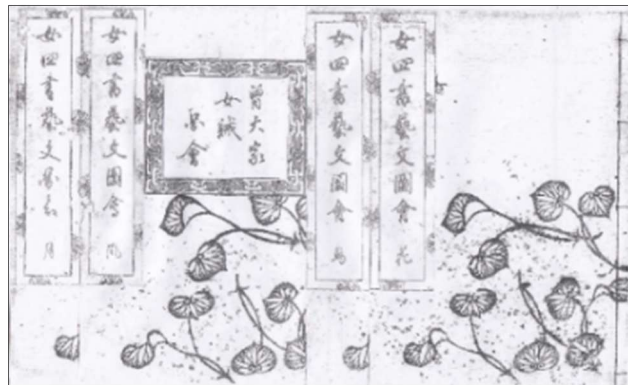
郷土資料担当 八代 右子

今回は通常とは違う視点から古書の魅力を紹介します。数年前の古典籍の展示会の折、当館での日本を代表する古書として入り口を飾った『女四書芸文図会』です。天保六年、大阪の秋田屋太右衛門[他]の刊で世に出ました。

表紙が色刷り模様入りなのは勿論のこと、口絵や題箋にもキュートでモダンな縁取りがあり、さながら江戸のリバティです。『女誠図会』『女論語図会』『女孝経図会』『列女伝図会』の四編構成ですが、表紙写真でお気づきでしょうか？

各巻の表記が『花・鳥・風・月』となっています。『一・二・三・四』ではないところに、上流階級の女性を読み手と意識した細やかな心遣いを感じます。自分が江戸に生まれていれば、お目にかかることのなかった書物なのかもしれません。

おまけ：皆さんに紹介するため、表紙を準備していて気づきました。題箋の台紙をよく見ると、花鳥風月の順にピッタリと切り口が一致します。何という細やかな神経の仕事なのでしょう。衝撃的な発見でした。



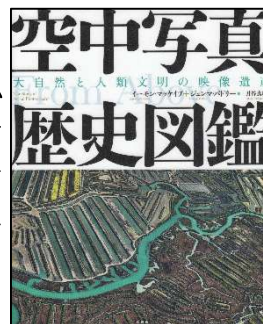
## ■新着図書紹介(郷土・参考資料コーナーに新しく入った図書)

### 『空中写真歴史図鑑』 イーモン・マッケイブ[ほか]著 原書房 R290マ

「空を飛ぶ鳥のように、世界を眺めることができたなら…。」

—そんな願いを叶えるかのように、上空から地球の撮影を試みる「空中写真」の数々は、私たちが日常で見ることのできない決定的な瞬間を次々に捉えてきました。その感動と驚きは、写真家がカメラ片手に飛行機や気球から身を乗り出して撮影していた時代から、ドローンや人工衛星など現代の技術を用いて画像を映し出す今日まで、決して変わることはありません。

本書で切り取られた1つ1つの光景に目を奪われますが、とりわけ、戦争や自然災害が、都市とそこに住む人々の暮らしを脅かした様子を映し出した写真には、強く心を動かされました。それは、「3.11」の記憶があるからなのかもしれません。



### 『学名の秘密』 生き物はどのように名付けられるか

スティーヴン・B・ハード/著 上京 恵/訳 原書房 R460ハ

「学名」というと、なんだか堅苦しくて難解なイメージを持たれる方もいるかもしれません。でも学名の中には、「ダーウィンのフジツボ」「デヴィッド・ボウイのクモ」「ビヨンセのアブ」から、ハリー・ポッターに登場する生徒や魔法使いまで出てくるようです。

歌手や俳優といった芸能人、スポーツ選手、政治家、命名者の家族、映画や小説の架空のキャラクターまで多種多様な名付け様に、ちょっと親近感を覚えませんか？

そもそも生物はどのように分類され、名前を付けられるのか。なぜ学名を付けられる必要があるのか。学名を付けることの意味や、新種の命名権の売買まで、名付けにまつわる物語を分かりやすく解説していて、科学エッセイとしても楽しく読めます。



■編集後記■ 今年度最後の「郷土のかぜ」をお届けします。国文学研究資料館「新日本古典籍総合データベース」から市民図書館が所蔵する古典籍のデジタル画像 528 点が閲覧できるようになりました。ぜひご活用ください。来年度も「郷土のかぜ」をどうぞお楽しみに。

発行:仙台市民図書館 郷土・参考資料コーナー

所在地:仙台市青葉区春日町2-1せんだいメディアテーク内 TEL:022-261-1585